

書評

日本科学哲学会編， 野本和幸責任編集，
『分析哲学の誕生 フレーゲ・ラッセル（科学哲学の展開 1）』，
勁草書房，2008.

伊藤 遼*

1. はじめに

本稿は、日本科学哲学会の編集によるアンソロジー、『分析哲学の誕生 フレーゲ・ラッセル（科学哲学の展開 1）』（以下、『分析哲学の誕生』とする）を紹介するものである。これは、日本科学哲学会において、故石本新氏による寄付のもと進行中のプロジェクトの成果の1つであり、「科学哲学の展開」という2冊のアンソロジーのうち第1巻として刊行された。第2巻は、『科学哲学の現在 物理学と生物学の哲学』として刊行される予定であるという。

さて、本稿が取り上げる『分析哲学の誕生』は、大きく分けて3部から構成される。まずは、フレーゲ・ラッセルの生涯およびその哲学がそれぞれ簡潔にまとめられた上で、100年近くにわたるこれまでの日本におけるフレーゲ・ラッセルについての研究の歴史が概観される。次に、1970年から2005年というごく最近までの間に日本科学哲学会の会員によって書かれた、フレーゲ・ラッセルに関する代表的な論文12編が収録される。そして最後に、これまでの日本における、フレーゲ・ラッセルに関する翻訳や論文を一挙に記した、詳細な文献目録が収められている。

以上のような『分析哲学の誕生』の構成と私自身の関心とから、本稿では、書評としては偏ったものになってしまうかもしれないが、収録された12編の論文のうちの、最近10年の間に書かれた主としてラッセルを扱う論文2編を扱うことでもって、その紹介に代えたいと思う。その2編とは、すなわち、中川大氏の「初期ラッセルにおける『表示』の概念 1903~1904年の草稿を中心に」(2001)と、松坂陽一氏の「フレーゲのGedankeとラッセルのProposition “On Denoting”の意義について」(2005)である。

2. ラッセルの「表示の理論」と「記述理論」

さて、本稿で取り上げる2つの論文は、いずれも1905年に書かれたラッセルの「表示について」(“On Denoting”)という論文の内容に少なからず関わる。そこで、まずは、それ以前のラッセルの体系と、「表示について」の内容とについて簡潔に説明

し、また訳語の選択についても明らかにしておきたい。

まずは、1903年の『数学の諸原理』(*The Principles of Mathematics*)におけるラッセルの体系を確認しよう。そこでは、思考の対象となりうるものは何でも「項 term」であり、それはなんらかの意味で存在を持つ「存在者 entity」である。それゆえ、命題もまた項であり、それはいくつかの項からなる「複合体 complex」である。したがって、命題の構成要素はなんらかの存在者そのものであることになる。言い換えれば、命題において語られる対象それ自体が、その命題の構成要素なのである。このように捉えられた命題は、現在、「単称命題」、「ラッセル的命題」などと呼ばれるという。

ところが、『数学の諸原理』の体系には、このような命題に対する考え方について、ある例外が存在していた。それが「表示句 denoting phrase」と呼ばれる言語表現である⁽¹⁾。表示句は「表示概念 denoting concept」と呼ばれる存在者を「表現 express」し、その表示概念が、語られる対象(「表示対象 denotation」)を「表示 denote」する。そして、こうして語られる表示対象は、それが語られるところの命題の構成要素ではない、とされたのである。また、ラッセルは、表示概念を、「表示的複合体 denoting complex」や「意味 meaning」などとも言い表す⁽²⁾。そして、このような表示という概念を用いた体系は、「表示の理論」と呼ばれる。

1905年の「表示について」は、この表示の理論が放棄され、それに代わる「記述理論」が展開された論文である。記述理論とは、表示句はそれ単体でなんらかの存在者を指示するものではなく、それゆえ、表示句が現れる命題は、いつでもそれが現れない命題へと分析・還元できる、というものである。

3. 「初期ラッセルにおける『表示』の概念 1903~1904年の草稿を中心に」

中川大氏によるこの論文は、ラッセルの哲学における表示という概念に対する考察を通して、その関数論⁽³⁾に「新しい見取り図」を与えるものだと言えよう。大まかに言えば、その議論は次のようなものである。前章で見たように、記述理論によって、表示という概念は放棄されたと考えられるが、実は、「表示について」以降の論文にも、表示という語は現れる。その説明として、ラッセルの表示という概念に両義性を認めることはたやすく、また関数論におけるラッセル自身の記述もその解釈を支持するようである。しかし、その実、表示という概念に両義性などなく、その概念によって特徴付けられたラッセルの関数論の複雑さが、あたかもそこに両義性が存在するかのようになれわれを導くにすぎない。以下では、このような、表示という概念をめぐる議論と、その概念によって特徴付けられるラッセルの関数論とを、詳しく紹介した上で、この論文に対する若干の考察を行なうこととしよう。

3.1 表示という概念をめぐる

中川は、まず、1905年の「表示について」から、1910年から1913年にかけて刊行された『プリンキピア・マテマティカ』(*Principia Mathematica*)に至るまでの間においても、ラッセルが「表示」という言い回しを用いていることを指摘する。その例として、「命題関数が命題を不特定の(ambiguously)表示する」(p.244)という表現が挙げられる。このことは、「表示について」の議論によって、表示という概念は放棄された、という一般的な見解と矛盾するかのようである。ここに疑問が生じる。

このような疑問に対してまず、「表示について」における「表示」と、先のような表現で言われる「表示」とは、異なる概念であるとする解釈が立てられる。すなわち、ラッセルの表示という概念に両義性を認める解釈である。そして、この解釈を支持するような、関数をめぐるラッセルの議論が存在することも指摘される。それは、簡潔に言えば、関数には「表示的関数」と「非表示的関数」との区別があり、命題関数は後者にあたる、というものである。この議論と、先に述べた「命題関数が命題を不特定の表示する」という主張とを合わせれば、命題関数は、「表示する」とともに「表示しない」ということになる。このことが矛盾でないとするれば、それは表示という概念に両義性があるとしか考えられないだろう。

しかし、中川は、以上のような解釈が可能であるというのは「錯覚である」(p.246)と言う。中川によれば、命題関数が「非表示的」であるとは、命題関数そのものが表示しない、ということではなく、「独立変項の意味 それも関数の値に対応する意味を含むところの、従属変項の意味が表示しない」(p.247)ということなのである。そして、命題関数そのものは、やはり表示するのである。このような主張が受け入れられるためには、ラッセルの関数論についての理解が必要となる。次節では、中川によるそれを見ることとしよう。

3.2 ラッセルの関数論

中川によれば、ラッセルの関数論は「表示という観念と独立変項・従属変項という枠組みが交差する、複雑な構成」(p.250)を持つ。まずもって、中川は、ラッセルによる関数の定義を1904年に書かれた諸草稿の1つから引用する。それによれば、関数 Φx とは、「ある値をアーギュメントと呼ばれる変項 x にわりあてることで、ある一群(a set)の存在者から1つのそしてただ1つの存在者が選出されるように、その一群の存在者を不特定の表示する任意の仕方」(p.248)⁽⁴⁾であり、選出されるその1つが関数の値である。そして、「関数そのものは、その値のどれとも違って、値あるいは値を表示する複合体を不特定の表示する」とされる。ラッセルの関数観は、

このように、表示という概念によって特徴付けられるものであると同時に、「独立変項」と「従属変項」という「伝統的な枠組みにのっとった」(p.249)ものでもある。関数 Φ_x は、独立変項 x の値によってその値が変化する従属変項である。つまり、関数は従属変項として与えられるのである。中川は、変項による関数の特徴づけに関しても、1904年の草稿から、いくつかのラッセルの記述を引用している。その内容を、以下にまとめてみよう。

- (1) 独立変項には、存在者変項と結合様式変項とがあり、これらの変項と「確定した定項的結合様式」とによって従属変項が定まる。
- (2) $\Phi^{\hat{x}}$ という記号によって、1つの存在者がある複合体⁽⁵⁾に入る可能な仕方のうち、変項的なものを表示する。
- (3) $\Phi^{\hat{x}}$ の特定の値 $f^{\hat{x}}$ は、関数（「存在者の関数」、「存在者関数」）と呼ばれる。
- (4) x が任意の存在者であるとき、 $f^{\hat{x}}$ は、 $f^{\hat{x}}$ の値であり、 $f^{\hat{x}}$ によって差し示される結合様式で結びついた存在者の複合体である。

$\Phi^{\hat{x}}$ などの記号において、 x の上に付された「 $\hat{}$ 」は、関数そのものについて語っていることを、また、 Φ の横の「 $\hat{}$ 」は、関数が表示的関数であることを、それぞれ示す。中川によれば、(1)で言われる結合様式とは、「複合体からその構成要素をすべて取り去ったあとに残るような、複合体のもろもろの構成要素を結合する仕方」(p.250)であり、それ自体は複合体の構成要素ではない。(2)における $\Phi^{\hat{x}}$ は、一種の述語変項として理解できよう。ところで、関数と複合体とでは、そのいずれが論理的に先行するのだろうか。中川はこのことを論じたラッセルの議論を紹介する。そして、それによれば、関数が複合体に先行するのである。というのも、関数は、(2)と(3)とから分かるように特定の結合様式を表すものであるが、複合体は必ずなんらかの結合様式を必要とするからである。

さて、以上のような関数論が、いかにして、前節で見た「表示」をめぐる中川の解釈を裏付けるのかを見てみよう。まずもって、本節の最初に見たように、関数は「一群の存在者を不特定のに表示する」。関数そのものは、表示するのである。ここで、「 x の父」という表示的関数を考えよう。この関数そのものは、値を表示する複合体の一群を「不特定のに表示する」。さらに、その1つ1つの複合体は、「ソクラテスの父」のように、それぞれ表示句であり、したがって、なんらかの存在者を表示する。「 x の父」が、表示的関数と呼ばれるのは、この意味においてである。次に、「 x は人間であ

る」という命題関数を考えよう。命題関数は、非表示的関数なのであった。この命題関数が、「ソクラテスは人間である」といった諸々の命題を「不特定のに表示する」、ということは先と同じである。しかし、この関数の1つ1つの値は、命題であり、それゆえ、存在者である。それは、表示句ではない。したがって、その値が、表示句として、なんらかの存在者を表示するという現象は起こらない。こうして、命題関数が「非表示的」であるとは「独立変項の意味　それも関数の値に対応する意味　を含むところの、従属変項の意味が表示しない」という意味で言われている、と理解できるのである。

この論文における中川の主張の要点は、次のようなものだろう。それはすなわち、ラッセルにとって、関数とは、表示という概念によって特徴付けられるものであり、このことは、記述理論によって、(表示的関数の値がそうであるところの)表示句による表示という現象が消去されることになった後も、変わることがなかった、というものである。

3.3 考察

この節では、以上のような中川の議論に対して、若干の考察を行なうこととする。この論文で扱われる「命題関数が命題を不特定のに表示する」というラッセルの主張は、『プリンキピア・マテマティカ』からの引用という形で、ラッセルを扱う論文においてしばしば見つけられるものである。そして、このような表現を見た者が抱くであろう「なぜ『プリンキピア・マテマティカ』に表示の話が出てくるのか」という疑問を、この論文は、見事に捉え、かつ明晰に解消するものだと言えるだろう。

ところで、表示をめぐる議論と並んで、この論文の重要なテーマとなっているのが、ラッセルの関数論であった。この論文は、表題にある通り、関数を扱った1904年の諸草稿について、その簡単な紹介を行なうにとどまっているが、中川の意図した「正しい問題」の設定という点については成功しているように見える。「正しい問題」とは、「『関数』(および命題関数)という概念を特徴付けるために、ラッセルが選んだ『表示』という概念は、はたして適切なものでありえたのか」(p.251)というものである。この論文が提起した、表示という概念に特徴付けられる関数論という論題は、興味深いものである。

また、この論文が収録されるにあたって付された「後記」では、中川はさらに進んで、変項の使用という観点から、記述理論の使用は、表示という概念の放棄を迫るものではなく、むしろ、それに基づく関数論を保持する志向と結びついている、とする解釈の可能性を示している。これも興味深い議論である。

4. 「フレーゲの *Gedanke* とラッセルの *Proposition* “ *On Denoting* ”の意義について」

松坂陽一氏によるこの論文には、その論理の展開において中心となる議論が2つある。1つは、その表題の通り、フレーゲとラッセルとの間にある命題をめぐる考え方の根本的な相異である。そして、もう1つは、ラッセルの「表示について」における、“ *The Gray’s Elegy Argument* ”⁽⁶⁾ と呼ばれる議論の解釈と、フレーゲへのその応用である。そして、この2つの議論から、「表示について」がラッセルにとって持つ意義が新たに解明されるのである。以下では、2つの議論についてそれぞれ簡潔にまとめた上で、「表示について」が持つ意義を明らかにし、最後に、この論文に対する若干の考察を試みる。

4.1 言語哲学における、フレーゲとラッセルの立場の相異

松坂が指摘する、フレーゲとラッセルとの間にある命題をめぐる立場の相異をまとめよう。フレーゲによる「意義 *Sinn*」と「意味 *Bedeutung*」との区別は有名である⁽⁷⁾。フレーゲにとって、命題とは、「思想 *Gedanke*」を表すものであり、そして、その思想 *Gedanke* の構成要素となるのが、その命題に現れる諸々の語の意義 *Sinn* である。そして、命題に現れる語が指示する対象それ自体、すなわち意味 *Bedeutung* は、思想 *Gedanke* の構成要素ではない。一方、命題の存在論を採るラッセルにとっては、命題に現れる項は、その命題の構成要素となるのであって、それゆえ、真なる命題とは、松坂の言葉を借りれば「ほとんど事実と区別できないような存在者」(p.271)なのである。両者の体系の間にあるこのような相異については、松坂が引用する次の例が分かりやすい。

モンブランは4000 m以上の高さがある。

フレーゲの立場からすれば、この命題の表す思想 *Gedanke* の構成要素となっているのは、モンブランという語の意義 *Sinn* であって、モンブランそのもの、すなわち、その意味 *Bedeutung* ではない。一方、ラッセルの立場からすれば、この命題は、モンブランそのものを構成要素として含む単称命題なのである。

しかしながら、両者の体系の間には、全く共通点がなかったわけではない。ラッセルの表示の理論を思い起こしてほしい。表示句が現れる命題において、表示句が語るうとする対象（表示対象）はその命題の構成要素とはならず、その対象を表示するところの表示概念のみがその構成要素となるのであった。両者の共通点とは、表示の理

論における表示概念と表示対象との区別が、フレーゲの意義 Sinn と意味 Bedeutung との区別とおおよそ一致する、ということである⁽⁸⁾。

また、松坂は、表示句が現れる命題を「表示的命題」と呼ぶ。すると、表示の理論を採用するラッセルにとって、命題は、単称命題と表示的命題のいずれかであることになる。

4.2 表示概念をめぐるジレンマ

この節では、松坂が、「表示について」における難解な議論として知られる“ The Gray’s Elegy Argument ”に対して与える解釈を見ていこう。

1905年、「表示について」において、ラッセルは、表示の理論を放棄し、それに代わって記述理論を展開したのであった。その中で、表示の理論を放棄する理由をラッセルが述べた箇所として考えられるのが、“ The Gray’s Elegy Argument ”と呼ばれる箇所である。松坂は、ここで述べられているのは、表示概念そのものについて語ろうとする場合に生じる次のようなジレンマである、と考える。

ある表示句に関して、その表示対象ではなく、表示概念についてわれわれが語ろうとするならば、表示の理論の体系では、次の2つの方法が考えられるだろう。1つは、単称命題による方法であり、もう1つは表示的命題による方法である。前者の方法では、表示概念そのものを構成要素として含むような単称命題が用いられる。後者の方法では、語ろうとする表示概念を表示対象とするような（また別の）表示句を含む表示的命題が用いられる。しかし、そのどちらの方法も、それぞれ、ある理由で認められない。それゆえ、表示の理論の体系では、表示概念そのものについて語ることはできないのである。このことが表示概念をめぐるジレンマに他ならない。

まずは、前者の方法が検討される。ここで松坂は、デイヴィッド・カプランの「意味引用 ^m...^m」というアイデアを導入する。意味引用とは、「上添え字の‘ m ’に挟まれた表現の意味を表すもの」(p.260)である。この意味引用によって、ある表示句が表現するところの表示概念そのものについて語ろうというのである⁽⁹⁾。このような方法は、表示句“ the center of mass of the solar system ”を例に検討される。

^mThe center of mass of the solar system^m is a point.

この命題は、“ the center of mass of the solar system ”という表示句が表現するところの表示概念“ ^mthe center of mass of the solar system^m ”について語る単称命題である。したがって、この命題は、“ ^mthe center of mass of the solar system^m ”という表示概念を構

成要素として含むことになる。さて、ここで、このような表示概念について語る単称命題ではなく、同じ表示句が現れるふつうの表示的命題について考えてみよう。

The center of mass of the solar system is a point.

この命題は、表示句“ the center of mass of the solar system ”が表示するところの太陽系の中心そのものについての表示的命題である。ところで、表示的命題においては、命題の構成要素となるのは、表示対象ではなく、表示概念なのであった。したがって、この命題は、表示概念“ ^mthe center of mass of the solar system^m ”を構成要素として含むはずである。

ここに問題が生じる。というのも、これら2つの命題は、それぞれ別の存在者について語る命題であるはずなのに、その構成要素で見れば全く同じものになるからである。2つの命題で、“ is a point ”という部分は同じである。したがって、差異があるとすれば、それは“ ^mthe center of mass of the solar system^m ”と“ the center of mass of the solar system ”との間にあるはずであるが、そのいずれにせよ、命題の構成要素となるのは同じ“ ^mthe center of mass of the solar system^m ”なのである。したがって、表示概念について語ろうとする単称命題は、その表示句が現れるところのふつうの表示的命題と区別できないものになってしまう。こうして、単称命題によって表示概念を語るという方法は、認められないのである。

次に、後者の方法、すなわち、語ろうとする表示概念を表示対象とするような（また別の）表示句を含む表示的命題を用いる方法が検討される。松坂の議論に従えば、もしこの方法を採用すると、語ろうとする表示概念そのものを表示対象とするような（別の）表示概念は、その語ろうとする表示概念のみから決定されることになる。しかし、このことは、ラッセルの「表示対象から意味への逆向きの道は存在しない」⁽¹⁰⁾という主張によって退けられるのである。われわれは、表示概念から、その表示対象を決定することができる。これは、表示の理論の基本テーゼである。しかし、逆に、何らかの対象から、それを表示するような表示概念を決定することはできない。というのも、「あらゆる対象は無限個の異なる表示句によって表示されうる」⁽¹¹⁾からである。それゆえ、「表示対象から意味への逆向きの道は存在しない」と言われるのである。こうして、表示概念を、表示的命題によって語るという方法もまた認められないことになる。

4.3 ジレンマのフレーゲの体系への応用と、その解決

松坂は、表示概念を表示的命題によって語るという方法が持つ問題と原因を同じくする困難が、フレーゲの体系においても生じうると考える。表示概念と表示対象という区別が、フレーゲの意義 Sinn と意味 Bedeutung という区別におおよそ一致することを思い出せば、これは自然なことであろう。フレーゲの体系に困難が生じるのは、特に「文が間接話法の脈絡に多重に埋め込まれたときに何を指示 (bedeuten) するのか」(p.263) についてである。本稿では、紙幅の都合上、これについての松坂の詳細な議論を説明することはできないが、松坂が指摘する、フレーゲの体系に生じる困難と、表示概念を表示的命題によって語るという方法が持つ問題とに共通する、ある原因については触れておきたい。松坂によれば、それは「われわれが語りたい対象 表示的複合体あるいは意義 を表示し、従ってわれわれにその対象を『与えて』くるとされる存在者 更なる表示的複合体あるいは間接的意義 の不可測性」(p.265) に他ならない。

さて、このような「不可測性」の問題を指摘した上で、松坂は、フレーゲの体系に生じる困難やラッセルの表示概念をめぐるジレンマについて、さらに議論を広げる。ここで考察されるのは、直接話法などの引用符を用いた文である。まずもって、フレーゲの体系では、先に述べられた間接話法と同様の現象が、直接話法についても生じうることが論じられる。さらに、松坂は、カプランの“ \$entence ”⁽¹²⁾ という道具立てを用いて、単称命題の「言語的対応物」なるものを考えた場合に、単称命題によって表示概念について語る場合と同様の問題が起こる、ということ論じる⁽¹³⁾。

そして、“ \$entence ”を用いたその議論から、松坂は、次のような洞察を引き出す。それは、すなわち、表示概念について語る単称命題をめぐる問題は、単称命題と表示的命題との本質的な相異が、語ろうとする対象が命題の構成要素となるか否かという点にではなく命題におけるその対象と述語との「結合の様式」にある、ということを見落とすために生じる、というものである。松坂によれば、これら 2 種類の命題が、それぞれ全く異なった構造を持つものであることを認めれば、“ The Gray’s Elegy Argument ”で論じられたジレンマはそもそも生じる余地がない、ということになるのである。

4.4 “ On Denoting ”の意義

さて、前節で見たように、ラッセルが“ The Gray’s Elegy Argument ”で論じたジレンマが記述理論とは違った形で解決され得るとすれば、もしも「表示について」の後にラッセルがそのことに気付くことがあったなら、ラッセルが再び表示の理論を採用するということはあるに違いないだろうか。松坂は、「そのような可能性はほとんどない」

(p.270) と言う。

先に見たように、ラッセルにとって命題（単称命題）とは、そこで語られる存在者そのものを構成要素として含むものであって、何かを「表象」するような「シンボリック」なものではない。しかし、表示の理論の枠組みで認められた表示的命題とは、そこに構成要素としては含まれない対象について、それを表示対象として表示することによって語るものであり、そこには「表象」の働きが見られる。このことから、松坂は、表示的命題が、「表示について」までのラッセルの体系の「特異点」（p.271）であるとする。そして、表示句を文脈的に消去するという記述理論は、このような特異点そのものを消去する。このことは、前節で論じた、単称命題と表示的命題との間に構造の区別を認める、という松坂自身の考えたジレンマの解決法にはできないことである。松坂自身は明言していないが、記述理論がラッセルの体系における特異点の消去を可能にするということ、このことが、この論文の表題にある「“ On Denoting ”の意義」に他ならないだろう。

4.5 考察

この節では、松坂の以上の議論に対して、若干の考察を試みよう。まずもって、この論文で示された“ The Gray’s Elegy Argument ”の解釈は、非常に明晰で説得力がある。松坂の主張に従えば、この箇所をすっきりとした形で読むことができる。『分析哲学の誕生』の序論では、「近年話題」の論文として、この論文は紹介されるが、そうである理由の1つは、この説得力ある解釈にあるのだろう。

ところで、この論文には、更なる議論の余地を残す箇所が2つある。1つは、表示概念ないし意義 Sinn について語る上で問題となる「不可測性」である。これについて、松坂は、本稿で述べた以上は、ほとんど説明を行っていない。しかし、この「不可測性」は、意義 Sinn と意味 Bedeutung との区別を置く意味論の体系に、重大な問題を投げかけるように思われる。もう1つは、単称命題と表示的命題との間に構造上の差異を認めるという松坂のアイデアである。この論文は、そのアイデアを示すにとどまったが、その差異とは具体的にどのようなものなのか、さらに論じることができるだろう。

以上のことからすれば、この論文は、“ The Gray’s Elegy Argument ”に決定的な解釈を与えると同時に、表示概念ないし意義 Sinn に関する「不可測性」や、単称命題と表示的命題との構造上の差異といった、新たな問題を提起したものである、と言えよう。

5. おわりに

本稿では、『分析哲学の誕生』に収められた論文のうち、ラッセルに関する2編を紹介することしかできなかったが、興味深い内容の論文は、むろんこれらのみではない。新旧の論文を取りまとめた本書では、最新の論文によって、フレーゲ・ラッセル研究の「現在」をのぞくことが出来ると同時に、積み重ねられてきた過去の研究それぞれにとっての「現在」もまた知ることができる。本書の序論は、フレーゲ・ラッセルの哲学の概要と、日本におけるその研究の進展とを記したものであるが、それは、研究のスタートラインに立つ者にとってとりわけ有用であろうし、一方、本書に付された詳細な文献目録は、高度な研究に従事する者にとっても価値があるだろう。収録された12編の論文が、そのどちらにとっても、そうであることは言うまでもない。

以上のように、フレーゲ・ラッセルの研究に携わろうとする者にとって、本書が価値ある一冊であることを確認して、本稿を閉じることとしよう。

註

* 822.110.ryo@gmail.com

- (1) 表示句とは、大雑把に言えば、英語では、“all”、“some”、“the”などの冠詞を備えた名詞句のことである。とりわけ、“the”を備えたそれは「確定記述句」と呼ばれる。
- (2) この「意味 meaning」は、本文4.1節で論じるように、フレーゲのタームにおいては「意味 Bedeutung」ではなく「意義 Sinn」にあたることに注意されたい。
- (3) この「関数論」という語は、中川がその本文で用いるものであるが、それは、数学の1つの分野としての「関数論」、すなわち、複素数上の関数に関する解析ではなく、「関数一般の特徴づけについての議論」を意味するものとして理解されるべきであろう。
- (4) 原文については、Russell(1994, p.86)を参照のこと。
- (5) ここで言われる「複合体」とは、命題に限らず、存在者の複合体一般と理解されるべきである。
- (6) “The Gray’s Elegy Argument”は、「グレイの悲歌の議論」などと訳されるが、松坂自身は、その本文において特に訳をあてていないので、本稿もその方針に従った。
- (7) 本稿では、「意義」や「意味」という語の内容をめぐる混乱を避けるため、これらの語が、フレーゲにおける Sinn や Bedeutung の訳語として用いられる場合は、原語を併記するようにした。原語が併記されることなく用いられた「意義」や「意味」という語は、ごく日常的な内容を意図して用いられている。
- (8) このことは、松坂がその本文で引用するように、ラッセル自身が『数学の諸原理』において認めることである (Russell, 1903, p.502)。
- (9) ラッセルは、“The Gray’s Elegy Argument”において、表示概念そのものについて語る場合に、ふつうの引用符を用いたため、それを引用符が入り乱れた解読困難なものにしてしまっている。
- (10) 註(2)でも述べたように、ラッセルは、意義 Sinn にあたる語として“meaning”を用いていることに注意されたい。参考までに、「表示について」における原文を以下に挙げておこう。“...there is no backward road from denotations to meanings, because every object can be denoted by an infinite number of different denoting phrases.”(Russell, 1994, p.422)

- (11) 松坂は、「表示について」におけるこの箇所を引用していないが、分かりやすさのために私の判断で補った。原文については前註を参照されたい。
- (12) 松坂によれば、“Sentence”とは、「大雑把に言って、述語を直接対象と結びつけてできる存在者」(p.268)であり、「カプラン自身は、Sentenceを“valuated sentence”とも呼び、自由変項を含む式に対する付値の概念を用いてその存在論的な性格を説明している」(p.275)という。
- (13) 単称命題の「言語的対応物」とは、奇妙なものに思われる。2.章や4.1節で見たように、単称命題とは、いわば事実と言語表現との両方にまたがるような命題だからである。単称命題の「言語的対応物」を考えることが誤りであることは、松坂自身も述べるところである。したがって、ここでの松坂の議論は、一種の思考実験のようなものとして理解されるべきであろう。

文献

- Russell, B. (1903). *The Principles of Mathematics*, New York: W. W. Norton and Company.
——— (1994). *The Collected Papers of Bertrand Russell IV; Foundations of Logic 1903-1905*, London: Routledge.

[京都大学大学院修士課程・哲学]